

第3回世田谷区総合教育会議

日：平成27年10月17日（土）

場所：世田谷区民会館集会室

午後 0 時59分開会

(スクリーン使用)

保坂区長 皆さんこんにちは。世田谷区長の保坂展人です。それでは、これから総合教育会議を開いていきたいと思えます。

きょうのチラシにもありますように、総合教育会議は、私、区長が、教育委員の皆さんと公開の場で議論をするという場でございます。そして、今日はたくさんの傍聴の方にその議論を見ていただいています。この会議は1時間弱で終わらして、2時ぐらいから、後ろにテーブルが用意されておりますけれども、教育委員会主催のワークショップ、いわばその議論を受けてお話しいただくということでセットされています。一方通行ではなくて、きょう来た皆さんが保護者の立場、あるいは教員の立場、またさまざまな立場で意見交換ができるようにということを工夫して相談し、実施しています。

では、座って進行をさせていただきます。

まず、出席者を御紹介します。座っている順から、教育委員の井上委員、永井委員、澁澤教育委員会委員長、原委員、堀教育長というメンバーで進めさせていただきます。

それでは、このパワーポイントを使いながら振り返りをしたいと思います。

この総合教育会議は、まず1回目は会議の持ち方について開催をいたしました。これは5月にやりましたが、この会議の持ち方について公開でやろうとか、今私が申し上げたように、一方通行ではなくて、区民の方々にも参加していただくような形を目指そうと。こういったことが話し合われました。事実上の1回目というのが、7月24日に開催された第2回でございます。本日が第3回になります。

第2回はどんなお話をしたのかということ振り返りたいと思えますが、第2回の場合はきょうと逆になっておりまして、教育委員会のシンポジウムがあって、こちらの総合教育会議があるというような形だったかと思えます。

それでは、進めてください。

まず汐見稔幸先生に御講演をいただきました。特に幼児教育 きょうもテーマにしていきたいと思えますが、これは常々言われることですが、自尊感情、あるいは自己肯定感とも言います。これは世田谷区でも、「せたホッと」という人権擁護機関をつくったときにアンケートをとったのですが、今から2年半ほど前でしょうか、小学校5年生に、自分で自分が好きですかという質問に対して、約半分が「はい」と答えてくれるんですが、半分しかないんです。ところが、中2になるとぐっと減って3割にしぼんでいくと。また、

これは各種の調査で、日本の大学生だとか若者の自己肯定感、もう1つ、他者から必要とされているか、利己有用感と言いますが、そういったところがちょっと低いのが気になる。幼児教育を振り返りながら、ポイントはここのところだねと。

そして、偏差値、あるいは点数などの数値にあらわれるところは議論しやすいのですが、例えば直感力とか、異なる意見を調整し、つなげる力とか、遊びの中で大きく鍛えられていく能力ですが、そういったところがちょっと低いのではないかと。

そして、レジリエンス。子どもは失敗のほうが多いのが当たり前であって、失敗しながら、転びながら、けがをしながら育っていくんですが、最近の子どもたちは、いろいろ忙しく、習い事だとかをこなさなければいけない日程も多くて、失敗ということに余りなれていない。失敗をすることによって、失敗は失敗だよと言って割り切って立ち直っていく。その力がちょっと弱いんじゃないか。

それから、なぜそうなるのかわからない。これはブラックボックスと書いてありますけれども、そういうことを極めていく探究心とか、1日でわからなくてもずっと考え続けるようなところが不足しているのかなというお話でした。

そこで、結果が全てではなく、むしろプロセスを楽しませるということが大事だねというお話でした。結果は失敗であっても、その失敗に至るさまざまな試行錯誤が実りがあったよというようなこともあるでしょうと。そして、汐見先生が強調されていたのは、遊びの中で身につけるといいう力がやっぱりありますよと。この遊びは、大人がいない、子ども同士の、子どもが自立して、異年齢集団だとかお友達でルールを決めて遊ぶということは昔は当たり前でしたが、今は余りなくなりました。集まってゲームをやったり、ばらばらの漫画を読んだり、まったりはしているんだけど、遊びの中でさまざまな能力が強化されるということがない。試行錯誤してやってみるといいうことで、自己肯定基盤、自分は自分であるというようなところを強くしていくというようなことが大事だということをお話しされました。

その結果、自己有能感・有用感だとか、どうしてだろうという好奇心、できたよという達成感ややってみようという挑戦心、社会の中に自分があるよという社会性、チームワークをつくってできること、得意な人を立てて自分がサポートしていく、そういった協同性。また、思いついていく、こうやろうよというような企画力、そしてデザイン力、主体性。粘り強さでは大村さんのノーベル賞のお話はすごいですよね。世田谷区にお住まいです。いつかきつとこの区民会館で講演していただきたいと思っているんですが、粘り強さが大

事だというようなお話でした。

それでは、第1の議題に向かっていきたいと思います。きょうは時間が短いですが、2つのテーマでやっていきます。

1つは、世田谷区は今、新教育センターをつくろうとしています。これは、今弦巻にある教育センターが引っ越しをするということですが、引っ越しだけではつまらないだろう。むしろ、長い時間を経て、やっぱり教育の中身とか水準とか技術とか、変わってきているはずだということで、どんな教育センターにしようかという議論が続いていると聞いています。

実は、去年の5月に、堀教育長、そして世田谷区の4人の 2人は小学校の校長先生、2人は中学校の校長先生とともに、オランダの教育を見てまいりました。その様子をちょっと。

これは、コンビニじゃないです。コンビニみたいな入り口ですけれども、オランダの地域にある教育支援センターの入り口です。ちょっとデザインされたしゃれた建物なんです。これが中に入ってみると、ということで、次をお願いします。

2枚だけ写真を整えたんですけれども、これは幼児用とか、中には障害がある子たち用の教材が並んでいるんですけれども、この教材が世界中から取り寄せられています。オランダの学校には教材業者が営業をかけてはいけないんです。学校の先生は業者と会ってはいけないんです。ですので、全部センターにいる教育学者の方とかベテランの教員、教壇の経験を持つ先生が教材をセレクトしています。自分たちで研究して、これぞというものはどんどん買っています。したがって、こういう棚にある教材の中でこんな教材があるのと驚いたのは、シチズンシップ教育。いわゆる市民性、市民の一人として社会的に育ていくためのスキルを身につける教育なんです。こんな箱が1個16万円と高いんです。これはその箱に価値があるというよりは、そこでこの教材を使って行うワークショップだとか、展開をしていくサポート、そういうものも含めての値段なんだというふうに、案内をしてくれたりヒテルズ直子さんという日本人の方ですが、オランダ在住の教育に詳しい方が言ってくれました。

こちらは2階なんです。上のほうから下を見おろしたところで、ちょうどこの部屋が、この教育センターの研修室になっていました。日本もそうだったかと思いますが、水曜日がオランダの学校の研修日で、お昼でみんな授業が終わって、ここに先生方が集まります。そして、この教育センターに常駐している学者の方とか専門家の方と議論したり、あるい

は学校でこんな教材が欲しい、あるいはこの教材を使っているのもちょっとうまくいっていないみたいなことをきちっと話し合うことになります。

また、オランダの場合は学校1つ1つがかなり独自の教育をやっているんですが、全国一斉の学力水準というのも政府は要求していて、そこから落ちていくと、自由選択制ですから生徒が来なくなるんです。生徒が来なくなると、学校は潰れていくというある種の市場競争にさらされているので、ちょっと危なくなってきたときに、アラームがとまるんです。教育監督局というところが、要注意というアラームを出すんですけども、そうするとこの教育センターの専門家たち自身が学校現場に入って行って、なぜうまくいっていないのか、どこに問題があるのかということで、学校の現場で一緒になって学校の教育力を再建するというようなこともやっているそうです。

我々はたった数時間ここにいただけで、わかったことは少ないんですけども、とても画期的だなと思いました。

次は、世田谷区の教育センターで、現在は研究・研修、あるいは相談 これは教育相談ですかね 学校支援、情報という機能を持ってやっています。ここにもう少し機能を付加していきたいということを現在教育委員会のほうで検討されていると聞いています。

ここで研究や研修も、先ほどオランダの例を引きましたけれども、もっと掘り下げよう。そして、研修も現場に即した形にしていってはどうかと。

相談も、生徒の相談というよりは学校の先生の相談。中には、新任の先生でいろんな問題を抱えながら燃え尽きてしまう先生もいらっしやると聞いています。確かに学校の先生だけは職場に入ってすぐ先生になるわけで、ほかの職業ではみんな見習いとか研修期間とかがあるわけですがけれども、そういった先生の相談も含めた拡充が必要と。

次に学校支援と書いてありますけれども、日本では余りこれまで言われなかった概念なのかなと思います。学校は学校で自立的にしっかりやるべきであるということなんですけど、現実には、いろいろ問題が起きてきます。また、うまくいくときもあればうまくいかないときもあるのは、どの企業や社会組織でも起き得ることです。うまくいかないときに、その学校を支えるという機能、これは世田谷区で、地域で支えていただくというのを1つやっています。しかし、例えばその事業の内容だとか、あるいはチームワークみたいなところでいろいろ問題が発生してきたときに、新教育センターの中で学校をしっかりサポートするという、オランダで見えてきたような機能も必要なのではないかと。

それから、情報です。学校の先生や研究者、あるいは父母にとって、こんなにたくさん

の奥深い教材があるのかと。それはやはり安心感にもつながりますし、選択肢の多さにもつながります。それは、やぶから棒にいっぱいあればいいというものではありません。そうではなくて、それこそ古本を並べておいたらいいということではなくて、最先端の知見で、セレクトされた、子どもの学習や学びを支えるすぐれた教材というものが欲しいですよ。

そして、このところは汐見先生からお話をいただきましたが、幼児教育です。小学校1年生から教育が始まるのではなくて、義務教育は1年生からですが、やっぱり幼児教育というところを確立していこうと。世田谷区でも今区立幼稚園がだんだんこども園に転換していきます。そして、保育園でも幼稚園でも、いわばいろんな学びということについての取り組みは始まっています。そこについて、しっかりした視点を持とうよと。そして、地域とともにつながってという世田谷区の教育の特徴をさらに展開をしていくというような、少し拡大をしてやってみようということでもあります。

第1テーマはここまでです。それでは、ここまでのところで、まずは教育センター、幼児教育、そのあたりを井上委員、いかがでしょうか。学校の先生を養成するというような立場もおありだと聞いています。

井上委員 では私からは、今の区長の話を受けて2点お話しさせていただこうと思います。

まず、新しい構想の新教育センターについてです。オランダの教育支援センターのスライドに戻すことができたなら出していただきたいのですが、そこに「UW EDUCATIVE PARTNER」と書かれてあります。この「UW」というのは、私の乏しいオランダの知識ですが、「Your（あなたがたの）」を意味する代名詞です。「あなたがたの EDUCATIVE PARTNER」というタイトルになっています。日本の場合ですと、教育指導課の指導主事が指導に行くという感じですが、あなたのパートナーですよと、これは言葉の体系にもよるんですけども、そういう看板を掲げていることを印象深く拝見いたしました。

次に、たくさんの教材がそろっている場面がございます。今までも教育センターに関わる方は一所懸命にお仕事をされていたと思うのですが、区長や教育長の視察の話を伺いますと、そこにはいろんな教材があるということでした。教員の仕事の一番わかりやすい部分は、子どもたちに「いい授業」をするということにありますけれども、その「いい授業」をするためには、いろんな資料を見て、授業のプランを練ることが必要です。そのために

は、ひとりで考えるだけではなくて、これまで諸先輩がつくったさまざまなプランであったり、あるいは仲間で、これはおもしろい、これはいつか使えるな、と考えていくような題材がそこにあることが望ましい。そして、先生方がそこに行ったときに、専門家がいて一緒に授業プランをつくっていく。こういう授業をなさいとかが、こういうのがいいですよと一般論で話をするのではなくて、その学校の子どもたちに合ったプランを一緒につくっていくという形での、まさにパートナーとしての教育センターの機能が生まれたらいいなと期待しているところでございます。というか、ぜひ、考えていかなければいけないことであります。

保坂区長 突然ですが、堀教育長、一緒に行って、どんなふうに感じました。

堀教育長 今、区長から振り返りのお話を伺って、正直言いまして、学校の制度というんでしょうか、背景が大分違っておりましたので、勉強になるというか、カルチャーショックでした。ただ、先ほど区長のお話にありましたように、今教育センターを検討しているんですが、どうしても教育センターといえますと、教員の方々が集まってきて研究する、勉強するというふうには思いがちなんですが、こちらのほうでは、訪問するという新しいスタイルを 私たちにとっては新しいスタイルなんですけれども、そういうものを取り入れておまして、これは私どもが今後あるべき教育センターを考えるときの1つのスタイルだなと思っておりますし、実は区議会のほうで視察に行ったときも、そういう提案がなされており、また実践している自治体もありました。そういうことも踏まえて、いろんな視点から教育センターのあり方を検討していきたいなと思っております。

井上委員 もう1点、教育センターのイメージに、新規に幼児教育と地域連携という新しいテーマを掲げられております。前回の総合教育会議の内容を区長が整理された中に、子どもの自尊感情や自己有用感が低いという問題があり、また、それを汐見先生も、講演の中で大きなテーマとしてお話してくださいました。

私も、数年前に世田谷区の子どもたちを対象にある調査をしたのですが、そのときに、近所の大人たちとの交流がどれくらいあるかということと、子どもの自己像との関係を探ったことがございます。興味深い結果が幾つか得られたのですが、その1つは、基本的な生活習慣については近所の大人との交流が多い子どもたちも、そうでない子どもたちもあまり変わらないのですけれども、つらいことを最後までやり抜くこと、それから、誰にも優しくするということについては、近所の大人との交流が多い子どもたちの方が40から30ポイントも高かったことです。

単純な因果関係として考えることは適切ではありませんけれども、家族以外の多様な人間関係に触れることが社会性を養い、粘り強さ、区長の言われていたレジリエンス、そういったものが人としての優しさを育てることにつながっているのではないかということを感じさせるデータでありました。世田谷区は地域とともに子どもを育てるということはずっと訴えておりますし、またこのたび、新しい構想の幼児教育が始まっていく。そういう中で、この新しいテーマを核にした研究や活動が新教育センターでできたらいいなと考えています。

保坂区長 では続けて、親の立場で世田谷区の教育をこれからよくしていこうという議論なんですけど、永井委員、いかがでしょうか。

永井委員 私は、保護者でありますから、教育の内容が云々というのはほかの先生方をお願いするとして、学校支援ということについて現状と伺いますか、先生方は本当に多くの課題に取り組みながら日々子どもたちの指導に当たっていただいております。特にクラス担任の先生は、一人で何十人も子どもたちを見ていますから、本当に大変な御苦労があると思います。そうした中で、さまざまな個性を持つ子ども一人一人に気を配っていらっしゃると思うんですけども、例えば さんは何かいつもと様子が違うなとか、クラスの雰囲気になにかちょっと違和感があるなといった異変を感じ取るアンテナを敏感に先生のほうが立てていただいて、小さなことでも校長先生初め全教職員で共有して、先生一人で抱えることなく早期解決に向けた体制づくりができるような支援をしていただきたいと思っています。

それと、授業や学校生活の中でお手伝いが必要な場合があるんですけども、そういったときは校長先生が保護者や地域の方に支援ボランティアをお願いしたりしていたと思うんですけども、条件に合うちょうどよい方を探すというのはなかなか大変で御苦労があるなと感じました。そういったところでも、先生方の負担が軽減されるような体制にしっかりしていただきたいというのが、学校の現状から感じた私の思いではあります。

保坂区長 それでは次に、学校の教員の立場を長らくされてきた 原委員から。

原委員 教育センターは、やはり何と言っても教員の研修の場としての機能がとても大きいところで、これまでやってきたと思うんです。新しい教育センターの中で、研修・研究の拡充ということとあわせて、学校支援を拡充していただける、ここはとても新しい視点だなと。学校にとっても新しい視点だなと思っています。

そして今、区長から御紹介いただいたオランダの教育センターは、何かあるとチームで

直接学校に行って支援をするというシステムがあるということなんですけれども、多分学校支援の拡充の中には、そういうイメージもお持ちなのかなと思います。ただ、何かのドラマのせりふで、事件は会議室で起こっているんじゃない、現場で起こっているんだというようなせりふがあったと思うんですけれども、大変な状況になっている学校は、校長以下全ての先生たちが日々大変な思いをして、少しでもよくなるようにと頑張っている状況なんです。そこに、支援だという形で入ってこようとしたときの入っていき方というのは、とてもデリケートなものがあるなと私は思っています、ですので、会議室で理想論を唱えているようなチームが現場に来て、それは即戦力にはならないし、かえって内容をこじらせてしまうこともあるのかなと思うんです。

ですので、ここでの学校支援という形は、研修・研究、そして情報、さらに地域連携、こういう領域ともしっかり連携をとりながら、調和をとりながら、日ごろの学校と教育センターの関係がきちんと信頼関係で結ばれていて、学校側に活用できるものだという認識があって、初めて学校支援が成果を上げると私は考えています。

正直言って学校の中には、今もう学校で起こっていることの対応だけで手いっぱいなのに、外部からまた新たに一から説明しなければわからない人が入ってこられてというのは大変迷惑というような意識も否定できないと思うんです。ですから、決してそんなことにはならないような教育センターによる学校支援、チームによる支援というのを、それがどういう形が一番望ましいのかというのはこれからだと思うんですけれども、まさに学校の教員と一緒にこの新しい教員のための、そしてそれがひいては子どもたちのための新しい教育センターをつくっていくように努力をしていきたいと私は考えます。

保坂区長 自己肯定感、自尊感情、別の見方でもうちょっと幅広く見ると、子どもの幸福感ということにつながるのかもしれないですね。オランダでは、子どもの幸福感が世界一というようなデータもございます。澁澤委員長、総括的に、これから目指していく世田谷区の教育と、今の新教育センターのことで、御発言をお願いします。

澁澤委員長 総括的にというか、皆さんのお話を伺っていて、今の学校の教育をどうサポートしていくかという側面が1つと、今区長がまさにおっしゃったこれからの社会に対して子どもたちをどうつなげていくかというもう1つの役目が非常に貴重なのかなと。それは、この50年間、子どもは高度経済成長で、子どもたちがそれに適応するように育ててきた。ある意味では、均質的価値観を持って効率的に物を考えられる人間をずっと育ててきたのが、今ちょうど社会の変換期に来ていて、まさに幸福とは何ぞやということをもう

1回問われている時代に来ていると思います。それは多様性の問題で、多分この後の議題の特別支援教育の仕方の根本的なことにもつながってくるんだと思うのですが、そうなったときに、この教育センターというのはまさにその部分で、それこそ子どもたちをどういう社会に出していくのかということにも当然かわらなければいけない。ここの役割というのは、機能の集積ではなくて、むしろどうマネジメントするか、ここの教育センターをどう経営していくか。これは、区長自らが経営されるのかあるいは教育委員会なのかどうか、その辺はまだこれから議論を進めるところだと思うんですが、ここは経営をしていきながら、今、原委員がおっしゃったように、ある意味で絶対に学校の肩を出ない形で学校を支援しながら、なおかつ社会の価値観との接点をつくっていくという、足し算で考えるのではなくて掛け算で考える組織をぜひつくっていただければいいなと思っています。

保坂区長 ありがとうございます。読み書きそろばんの寺子屋から始まって、明治に学校制度ができて、そして高度経済成長時代はどんどん社会が拡大成長していく時代で、その時期に非常に安定的な社会の姿が一時日本ではあったんです。60年代、70年代、80年代の30年ぐらい、給料は少しずつ上がっていったり、住宅環境が目に見えてよくなっていたり、その後の20年、やはり大分壁に当たっているだけではなくて、地球環境一つとっても、殺人的に暑い、あるいは凍え死んでしまうほど寒い、こういった非常に厳しい自然からの復讐に我々は遭っているわけで、これからの社会、自然環境だけではなくて、シリアの半分の人口が難民化すると。これだって、これから日本と大きく関係をしてくる可能性もあります。不定形で先が見えないからこそ、自分の内側にしっかり土台があって、どんな予想しない状況でも、それなりの結論を選択していける力とといいますか、それが多分数値化される偏差値とかとは違う力なのかなと思います。

では、次のテーマに行きたいと思います。特別支援教育です。これも、オランダで見てきたことをお話しします。

これは、オランダの学校で見せてもらったコンピュータの画面ですけれども、太い2本の線がありますが、これはクラスの平均の点数です。これも、国語何点とかいうよりは、読解力とか書く力とか表現力とかいろいろ細かく分かれていたのですが、その中で1人のお子さんが、この場合は高かったんです。うんと上がっていた。場合によっては、後は伸びるんだけど、クラスの全体からどんどん離れていく場合がありますよね。これを専門に見ていらっしゃるプロの教員が2人いらっしゃいました。学校全体の子どもの一種の成長ぶり、学力の現状を見ている。

こういうふうな形で、世田谷区の学校も今頑張っているけれども、オランダの学校は個別指導でもこんなディスプレイを置いてタッチパネル式で最新鋭のものが入っていましたけれども、先生と生徒1人ということで、彼女のつまづいているところとか理解していないところに丁寧にサポートを入れていくという形。日本で言うと補習というんですかね。そういうものをやっていました。彼女の場合は1対1ですが、聞くと、2人とか3人に対して先生1人ということも含めて、なかなか理解がついていかない子どもたちに対してずっと支援を入れていると言っていたので、これは特別支援教育というテーマで紹介していますが、学校全体がそういう一人一人に即した教育ということを実はやっていきます。

これは、イエナプラン教育という新しい仕組みの中で、色鉛筆で色分けされているのは、持っている子どもの時間割なんです。ある日はずっとレポートを書いていたりと、ある日は算数をやっていたりと、自分で組み合わせています。だから、クラスの中に子どもたちがいるんですけれども、全員違う教科をやっている。そんなことがあり得るんだねということで、下村文部科学大臣も我々が訪問した半年後ぐらいにこの学校に行って驚いたということを知っていますけれども、一人一人に即してということで考えると、これから特別支援教育の仕組みが変わろうとしています。

平成23年に障害者基本法の改定があり、そして25年には障害者差別解消法がいよいよ来年の4月に施行されます。障害者差別解消法は、障害者権利条約を批准したことに伴って、ある種のこれまでの障害者支援、行政のやってきたことも含めて、学校教育も含めて問われると。つまり、一人一人の障害を理由にして何か壁をつくったり、区別をして排除したりしてはいけないということはもちろんこれまでもそうだったんですが、一層そのことを配慮しなさいというふうになります。そして、27年の東京都の特別支援教室ガイドラインとあります。

特別支援学級の一覧ですが、知的障害や肢体不自由学級ということで固定学級がある。それから通級ということで、情緒障害学級について、これまで1つの学校に通ってきていただいていたというところが変わるんです。

これまではそれぞれの小学校に在籍していたA、B、Cという小学校からDという小学校に通級してくるという仕組みでした。ここに情緒障害等通級指導学級ということでいわゆる特別支援学級が設置をされていた。これが大きく変わって、これからは1つに集めない。一つ一つの学校に特別支援教室をつくります。そして、巡回と書いてあります。いわ

ゆる教員、先生が回っていく、こういう仕組みになるということです。

そういうふうには特別支援学級、教育の仕組みも変わっていくんですが、現状から言うと、多分一人一人の障害とか特性に応じて、それにぴったりにみ合う指導とか授業をするというのは、マンツーマンとか2人、3人ならできるかもしれないけれども、10人を超えてとか、15人、20人となるとなかなか難しくなってくるだろうと思います。やはり学校現場も先生不足で、もっと学級の数を増やせ　これはよくない意見だと思いますけれども、子どもの数もようやく35人、あるいは30人というふうに向かってきた。世界の動向と見比べて非常に遅かったですが、そういうふうになってきましたけれども、障害のあるお子さんに関しては、一人一人のつまずきや、あるいは得意なことや　オランダの学校でおもしろかったのは、先ほどのグラフで平均より上の子がいますよね。平均より上がっちゃっている子。その子も特別支援教育の対象だということを聞いて、これは本当にびっくりしました。君は普通のをやっていたらつまらないだろう、これをやってみな、挑戦してみなといってやらせてもらえる。これはすごいなと思いましたが、そういう意味で、現状をすぐドラスティックに変えることはできなくても、ビジョンを持って1人1人に即した支援ということで世田谷区の特別支援教育を充実させていきたいということで、教育委員の皆さんの意見を、　原先生から。

原委員　今ちょうどスライドが写っているんですけども、現在のような通級制から、来年度から世田谷の全小学校にも特別支援学級が置かれて、教員のほうがそこに出向いて行って必要な指導をしていくというシステムになります。これは、子どもたちの負担も当然減りますし、本当に必要な指導を自分の学校の中で受けることができるという意味では画期的にすばらしいなと私は思っています。

今の特別支援学級の基準ですけれども、特別支援学級の編成基準は8名なんです。ですから、対象の子どもが8名までは1学級で、9名になると学級が2つになります。ここには出ていないし、当然世田谷区は持っていないですが、ほとんどが都立なんですけれども特別支援学校というのがございまして、こちらの標準は6名です。ですので、どちらかというともっと手厚い特別支援が必要なお子さんの場合には、特別支援学級ではなく特別支援学校のほうが、さらに少ない人数で1人1人の障害に合った指導を受けることができる、そんなシステムにはなっています。

全国の特別支援学校の校長の組織があるんですけども、全国特別支援学校校長会と言うんですが、そこでつい最近出た御意見では、今後の共生社会を実現するために、特別支

援学校としても、あるいは、各学校に置かれた特別支援学級においてもしっかりと特別支援指導をしていきたいと。この共生社会というのは何なのかということなんですけれども、障害がある人もない人も同じように一緒に社会の中で生きて生活して、幸せになっていくということを目指す社会だというふうに位置づけて、これからそれを目指しているんな活動をしていきたいというコメントを出しているんですけれども、私は本当にそのとおりだなと思っています。

先ほどのオランダの例の中で、平均より上回っていても特別支援の対象であるという考え方は、つまり言ってみれば、仮に障害があるとしても、障害があってある部分はできないことがあっても、それができないということは、その子の個性だと。同じように、あることがすばらしく能力が高くてできるということも個性だし、それができないということも個性であると。どちらも平均的な子どもに合わせた通常の指導ではない特別な支援、特別な指導が必要だという考え方なんだなと。こういう考え方というのは、教育の世界でも随分大きな変化だと思うんです。潮流が変わったんだと、私どもはそういう認識のもとで、この特別支援教育ということをさらに推進していかなければいけないなと思っております。

特別支援学校とか特別支援学級で必要な特別な指導を受けている子ども以外にも、現在の、今年度までの通級による指導を受けていることもない、通常の学級にいるだけの、実は特別の支援が必要な子どもというのは、平成26年度の文科省の調査結果によると6.5%程度、通常の学級に在籍しているという結果が出ています。ですので、自分が通っている、ふだん学んでいる小学校の中に特別支援学級ができれば、恐らくそういう特別な指導が必要なお子さんは、自分の学校の中にあるそういう学級に、必要な受けたい指導を受けるための時間だけ行って受けることができるようになるかなと思うんです。通級ですと、実は法的な縛りがちょっとあって、1週間に何時間通っていいかなんていうのが決められていたりするんです。ですので、特別支援学級が全ての学校に設置されるということは、そういう意味からもとてもいいことかなと考えています。

保坂区長 ありがとうございます。それでは、澁澤教育委員長からお願いします。

澁澤委員長 障害のあるお子さんを私たちは今こうやって議題にしていますけれども、障害のあるお子さんの反対側というのは、多分普通の子どもという言葉だと思うんです。そのときに、障害があるということと普通ということに線が引けるのかどうかというのは、私はとても疑問なんだろうなと。先ほどからオランダの教育にも出ていますけれども、そ

もそも線を引くんじゃなくて、一人一人の個性を伸ばしてやれる、本当はその教育ができれば一番いいし、ある意味ではその大きな体系の中で、個人個人、要するにある分野で能力の高い子も、あるいはほかの分野で能力が高い子も、即した教育が提供できるのが本当はいい。それは、先ほど申しましたこれから多様な価値を持った社会に変わっていく、職業のあり方ですとか働き方も物すごくこれから多様になってくると思うんです。

ただこれは全く新しいことではなくて、実は私は聞き書き甲子園という高校生たちをじいちゃん、ばあちゃんのところに行かせるという活動をずっと15年間続けていました、そうしますと、大体今80歳ぐらいのおばあちゃんのお父さんとかおじいさんたちというのは、何の職業かと聞かせるとう答えられないんですよ。それはなぜかというと、農家で米もつくっていたけれども、大工もやっていたな、けれどもあるとき薬売りもやっていたなといって、かつての日本というのはものすごく多様な働き方があって、それはお金になる、ならないということも含めて、要するに自分が役目として認められる社会、ものすごく多様な働き方、あるいは生き方が認められる社会がかつての日本にはあった。だから、何も新しい怖いものではなくて、かつてに戻れというのではなくて、多様な人材が今の社会の中で認められる。認められる中で、お金になることもあるしならないこともあるけれども、お金になることだけが重要ではなくて、お金にならないことも価値として認められるような社会を大人側がどうやってつくっていくか。教育の問題から広げて社会をどうつくっていくかということと一緒に考えていければいいなと思っています。

保坂区長 それでは、時間が近づきつつあるので、井上委員、永井委員、感想を。

井上委員 私は、今出た話とは別の視点で1つだけ申し上げます。今説明のあったオランダのスタイルというのは、教育学の歴史の中ではいわゆる新教育運動の流れに属するもので、保坂区長が言われたイエナプラン、ドルトンプラン、あるいはモンテッソーリメソッドというのは、個を中心にした教育のあり方なんです。ですから、1つの教室の中にそれぞれ違ったことをやっている子どもたちがいるのはいわば当たり前の世界です。そういう世界であれば、例えば、そこに障害のある特別な支援が必要なお子さんがいても、子どもたちは違和感がないし、先生も違和感がない。ところが日本の場合には、いいか悪いかは別として、クラスという集団をベースにみんなで同じことを学ぶというスタイルをとっています。先生は常に全体を見ながら、その中で、あの子にこういう問いかけをしてみようとか、ある子どもがいいことを言ったら、それについてみんなどう思う？というふうに、個と個のやりとりを全体に返すようなスタイルでやってきていると思うんです。そういう

中に、特別な支援の必要な子どもが入ってきたときに、今までのやり方ではうまくいかない。先生方も、従来のやり方ではうまくいなくなっている現状に気づきつつある。それを今後どうしていくのかという議論と研究を進めていかなければいけないと考えております。

永井委員 通常学級に通っている子どもたちも、得意不得意というのがあって、1人1人、障害のあるお子さんと通常学級に通っているお子さんとそんなに変わりが本当はないのかなと。個性というところで言うと、1つの個性でいいも悪いもあるというのが人間であるというふうに私は思っていますので、そこをどういうふうな形で支援していくのかということが今後課題になるのではないかなと思っています。

堀教育長 皆さん、きょうは総合教育会議の3回目に来ていただいて、どんな感想かなとお聞きしたいなと思っていますが、私どもは月2回教育委員会をしておりますが、その前後に情報交換を兼ねて今のような話を、格調高く話をさせていただいて教育論を展開しております。それぞれの立場からお出になっておりますので、今のような特別支援のあり方等々を踏まえて、子どもたちのために何ができるかということをしておりますので、月2回ですけれども、ぜひ教育委員会のほうも傍聴していただければありがたいなと思っておりますし、またいろんな形で御意見をいただければありがたいと思います。

保坂区長 第1テーマの新教育センターについては、つくっていこうということで、少し時間をかけて特性、コンセプトの議論を現在進めているところと聞いています。それに即して制度設計をし、澁澤委員長がおっしゃいましたけれども、教材が幾らいいものがあったとしても、建物がよくても、そこを回していくマネジメントがうまくいってなければそれは余り効果はないんだらうと思います。ただ、その中身についてどうしていくかというのはとても大事な話なんだというところでは一致できたのではないかと思います。

また、特別支援教育については、今私が説明したのは、東京都のほうでこういった法改正も踏まえて制度を変えますということで、変えた後、ではそれぞれの学校でどのように受けとめがあるのかということはまさにこれから、世田谷区の現場の学校で、あるいは教育委員会で担っていくことになるかと思えます。原委員がおっしゃったように、現在発達障害と言われる子どもたちが大変ふえていて、それぞれの特性でいるんですけれども、6.5%という数字はちょっとオーバーじゃないかと私は思っていたんですが、学校の現場や、発達障害支援の放課後の民間事業者のサービスが、世田谷区内にも昨年だけで10数箇所できているんです。そういう意味ではかなり広がっているなということで、井上委員の

おっしゃったオランダのように一人一人がばらばらで学んでいくという教育の形態ではないので、いろいろ課題も多いんだろうと思います。特別支援教育については、これから多分理想とビジョンを形にするためのさまざまな橋をつくったり、輪郭を定めたりして、1人1人のお子さんが成長していく基盤を保障していくということになっていくのかなと思います。

いずれも、教育センターの新しい組み立てができて、稼働していくとしたら、重要なテーマになるのだろうと改めて認識をしたということで、きょうの第1部の総合教育会議、あっという間に終わりましたけれども、時間だというサインがさっきから来ておりますので、この辺でくくらせていただき、またこの後、皆さんがいろんなことを感じになった、あるいはお考えになったことはぜひ、ワークショップで参加と協働ということで、一緒に知恵を出していただけたらと思います。大変ありがとうございました。（拍手）

午後1時55分閉会